

同志社学園の諸問題

大塚節治

私共は来る十一月二十九日同志社創立第八十七年の記念日を迎えます。また本年は大学開設五十年になります。同志社関係の皆様とともにわが学園が直面している諸問題についてその性格を一層よく理解し、その解決の方向を尋ねてみたいと思います。将来の幻を画くことは他日にゆずります。

学園の諸問題は実はすでに、同志社タイムスの九十年記念事業特集号で数えあげたのでありますが、そこでは唯問題をあげただけでその解説も不充分であつたし、また、二、三省いたものもありますから、ここにそれらの点を加えて、今一度、皆様と共に考えてみたいと思います。私共が過去十二年の間に取組んできた問題あるいは当面した問題は色々ありますが、ここにその主なものをあげたいと思います。そしてそのうちあるものはほぼ解決したのでありますが、懸案になつてゐるものもあり、また、一応解決したが、更に将来に大きな問題をなげかけるものもあります。第一は財団法人を学校法人に切りかえるための寄附行為の改正、第二は教職員の待遇改善のための適当な賃銀体系の確立と年金制度の樹立、第三は校舎、

研究室、体育館、寄宿舎などの施設の拡充、第四は教授陣容の充実、第五は総合学園における一貫教育の問題、第六は総合学園における独算制の問題、第七は職務章程作成の問題、第八は精神教育の徹底強化の問題などでありました。

これらのうち第一は昭和二十六年二月から新寄附行為により学校法人として新出発し一応解決したのでありますが、その短所も過去十一年間の実施によつて明らかとなり改正の要に迫られております。例えば、学長、校長互選の理事が、二名となつておりますが、それはもう少ししました方が適當と思われる。また、評議員は、教職員選出、校友、同窓選出等、完全連記となつておりますが、これは、一部連記が適當と考えられます。その他、学長、校長はキリスト教信徒たるべきことを明記することが今後のために必要でないでしょうか。ここには立学の精神にふれる大きな問題が含まれております。改正に当つては各自私心を去り、学園全体のために協力してよりよき寄附行為が生れることが切望されます。

第二の問題は年々ベースアップを實行して不十分ながら時勢に追

随し来り、昨年ようやく世間並の体系を作り、本年四月から完全実施したのであります。しかるに、世間は休みなく賃銀の引上げを行つていきますから、これまた近く修正をせねばなりませんまい。まことに寸時も安心休止することはできないのであります。また年金制度も本部、大学、女子大学、幼稚園にはなかったものでありますが、昭和三十三年四月から同志社独自のものを実施しましたから、老齢教職員の停年退職に当り当人、当局ともに苦痛を感じることが少くなりました。勿論、十分とは言えませんが今後の改善が望まれます。全体に待遇が改善され教職員の健康状態も、十年前にくらべると著しくよくなり、十二年前には長期療養者が三十余名あったのが昨年末には僅か四名に減少しました。これには色々な理由がありますが、待遇がよくなり、教職員の生活が向上したことによるものといわねばなりません。

第三の施設は第二と並んで大きな問題でありました。昭和二十五年以後二、三年間は教場不足で学生に迷惑をかけましたが、施設拡充費を設定して、その収入により年々増築し、昨今ようやく混雑の状態をぬけ出しました。戦前永久建築は煉瓦造り十一棟だけであり、そのうち最も大きな栄光館が僅か六百坪位でありましたが、戦後は二千余坪の尋真館を始め大小二十三棟の鉄筋コンクリート造りが已に完成し、目下建設中のものと間もなく着手するものを合わせると三十棟の永久建築物ができるわけであります。そのなかには、図書館の増築や新島記念館（学生会館）、工学部の実験、実習室、新神学館、香里体育館、高校のアドミニストレーション・ビルなども含まれています。未決定の女子大、女子中・高のものを加えると更に

増加いたします。これらは教育の内容を充実し、精神教育の実をあげるために欠くことのできない施設であります。例えば図書館の規格は学生一〇人につき一つの閲覧机を備えることになっておりますから、同大としては少くとも一五〇〇内外の閲覧机を用意せねばならないのでありますが、今は僅か五〇〇余りであって、約一〇〇〇不足しております。学生の空白の時間を利用せしめるためには図書館の増築は不可欠の施設であります。ここで皆様はなぜそんなに学生をふやしたかと疑問を抱かれるでしょうが、大量教育は今日の私学経営上不可避のことです。私学の大多数において、その經常費の約九五パーセントは学生の納入する学費に依存しております。そして学費の額には限度があり、やたらに増額することはできません。そこで逐年増加する人件費その他を賄うためには、学生の数で以て補うのほか差し当り途はないのであります。

他から巨額の援助なき限り、好むと好まざるとにかかわらず、私学の生きる途はある程度大量教育よりほかに途はありません。目下、全私学は協同して国庫補助の運動をしておりますが、なかなかちがひがありません。私が不思議に思うのは、なぜ、私学に子弟を送っている父兄が、国民として二重の負担をしているのに政府に向つて、その負担軽減のために国庫の補助を要求しないかと言うことであります。私は、すみやかに、全国私学父兄のこのような運動が起ることを期待するものであります。ところで、これには学生と教師との人格的接触不十分と言う大きな欠陥を伴うのであります。どうしてこの欠陥を克服するかは今日多くの私学が、問題としているところであります。そしてその解決の一方法として考えられたもの

が、すなわち学生会館（新島記念館と命名することになっております）であります。ここで教師と学生とは食堂において、談話室において、あるいは会議室において、あるいは娯楽室において互に相交わることができるのであります。今日の大学生々活は、課外の生活が教場の生活に劣らないほどの重要性をもっております。これ学生会館の生れる所以であります。以上のように終戦以来、すでに二十数棟の永久建築が聳え立ち、校庭は昔の様子を一変しましたが、これでもまだ不足しているのが女子大、女子中・高等のものを加えると沢山あります。全学共通のものについて言えば、数千人を容れる大講堂であります。新学制々度採用以来、ここ十数年週一回チャペル・アワーとアッセンブリー・アワーを設けてありますが、一八〇〇名出席すれば栄光館は超満員となり、残り一万余りの学生は参加できません。目下、学生の出席がわるいから会場が問題となっておりませんが、会場の狭いことは出席不良の口実に悪用されております。仮りに栄光館に入り切れないほど出席がよくなったとすれば、当座の解決としては、各学部別に二つの集会をもつほかありませんが、その場合は講師を得ることが困難になります。出席不良を幸として、当局があるべき会場の用意を怠り、且つ、出席を奨励しないことは非良心的であります。のみならず、現在大学の卒業式や入学式は、二回ないし三回にわけて行っており甚だ不便を感じている次第であります。この欠陥を補うには少くとも五、六千名の座席をもつ大講堂建設が望まれます。大体育館を建てて、それをその時に転用することも一策ありますが、それは最上の策とは思われません。何れとするもそれは実現はむづかしく、九十周年記念事業にも

入れてありません。その他事務職員の昼食時の休憩室もなく、また、女子職員の更衣室もなく、厚生施設の点においても今後に待つべきものが多々あります。これらのものは、鳥丸今出川の角地に大きなものを建て、三階以上を講堂とし一階、二階に凡ての事務室を集めると、その目的を実現することができのではありますまいか。寄宿舎の増設も教育上必要であります。紙数の関係上省略いたします。

第四、教授陣容の充実はその性質上早急にできない問題であります。が、戦後著しく充実してきたことは申すまでもありません。終戦当時大学においては、日本の博士の学位をもつ者は極めて少数でありましたが、今日は無数と言うほどで、ある学部では殆んど全部の教授が学位所持者であります。その他女子大には、日本の博士の学位をもつもの五人、香里高校に一人あります。これから立派な業績があげられることが望まれます。なお今後は後継者養成に留意して、なるべく能力、人物共に勝れたものを養成し学園に残るよう配慮ありたく、先輩教授各位に御願いたします。また外から人を招く際にはなるべく同志社の精神教育に共鳴し協力し得るような人を物色されんことを関係者は切望いたします。

第五、綜合学園における一貫教育の問題。この問題はここ十年來やかましく叫ばれた問題であります。一向にその解決の曙光が見えませんが、これは間接には総長たる私の責任であります。實際は当該学長、校長、各教授会、教諭会の権限に属するものであります。問題の性質上なんでもないようであつて時間のかかる問題であります。一口に一貫教育と言われますが、これには二つの異つた事

柄が含まれております。一つは進学の問題であり、他は中学、高校、大学間の教課教育上の連絡、協力の問題であり、また、その理念の簡明の問題であります。まず前者から申上げることいたします。

進学の問題は高校から大学に進学する際に父兄の一部の要求は、成績の如何にかかわらず無条件に入学を許可され度い。それが総合学園一貫教育の特色ではないかと言っております。これに対し、大学側は、如何に学内高校からの進学志望者といえども、学力劣等なるものをもって、外から来る優秀なる学生に代えることはできないと言ふことであります。年々同じ問題がくりかえされ、結局、大学側と高校側との話合いにより妥協が行われております。どうもそれに則つて機械的にやれるような規則または申合わせはできそうになく、毎年多少折衝の苦労が高校側と大学側にかかつてくるのであります。要するに高校卒業生がよく勉強して、中以上の成績をあげてゆけば問題は自ら解けてゆきますが、やんちゃ盛りの高校生を一人残らず品行方正、学力優等まで行かずとも、良き生徒に育てることはこれまた困難な注文で、多少不合格者がでるのは已むを得ないのではありますまいか。要は、学校も父兄も当人も、不合格にならぬよう努力するほかは解決の途はないのではありますまいか。

いま一つの一貫教育の問題は、目下委員をあげて研究中であります。委員も多忙であり、委員長たる私も多忙であつて、一向に進捗いたしません。思い切つて、人文科学研究所に、教育研究部門を設け、専任の研究員を置き委員と協力して、研究の成果を出すことが、同志社の行くべき方向のように思えます。

総合学園として、小学校をも設置すべしと言ふ声も強いのであり

ますが、それと共に総合学園における教育の根本理念を明かにし、現実に行われている教育の長短を知り、長所を強化し短所を補う方法などのほか、新島先生の教育理想の即時代的研究解釈等々同志社としては非着手すべき、教育上大切な問題が多々あります。研究所の教育部門に新島研究を抱括せしめることも一策でありましょう。

第六、総合学園における独算制の問題。これは同志社内十個の学校が、各自給自足の会計制をもっていることで、俗に独立採算制と呼んでおります。この方法は戦後二十四、五年頃、一、二の学校が赤字を出し、大学の収入に依存する状態を生じました。これに対し大学側から異議が出るに至り、遂に各学校とも赤字予算を組まぬようにしたのであります。それまでは、学費を値上げして増収をはからんとしても、生徒の質が落ちるとの理由で中・高側がなかなか承知せず、自然大学の収入に依存せねばならぬ事態でありましたが、これには大学当局が承知しないのみならず、大学々生の納入したものが、大学以外の学校に用いられることには大学生が反対で、本部当局は困りぬいた結果、各学校自給自足の方針を立てたわけであり。これは本部の経費分担を軽減せんとする傾向を生じ、本部縮小が主張され、本部の人員は極度にへらされ、今度は本部の機能が十分に果し難い情勢を生ずるに至りました。それに加えて、商高の如き、どうしても自立経済の成立しない学校がありますので、この独立採算制は絶えず非難されて来ました。しかし、一度これを元に戻して、総合経済にしますと、今度は各学校互に收支均衡の責任を感じず、学費値上も色々な口実で回避するに至り、本部当局は忽ち行詰つてしまうこと火を見るよりも明らからであります。事実、大

学の学費値上げは周知の如く、猛烈な学生反撃を受けるほど難儀なことであります。若し各校均衡予算の責任をなくして、綜合予算とするならば、本部が指示する必要収入を得る責任は本部当局に帰せられるが本部当局には、これを遂行し得る力はありません。このように独算制の廃止は事実不可能であるのみならず、理屈からいっても、不合理であります。会社の経営ならば、一方の不足を他方で補うことも可能でありましようが、学校の学費は左様な性質をもちません。唯、私共が社内各学校の協力態勢として、共通基金の積立をなし、それから生ずる果実をもつて、臨機窮境に面した学校を助けることは望ましいことであります。これからの問題はこのエマージェンシー・フアンドとも言うべきものを、各校協力して作るようにすることが残されております。

なお、学園の経理は、九十周年記念事業の募金が百パーセント成功しても、この事業から生ずる赤字と、以前からの建設その他のために生じている赤字を消却するには、今後、数年を要しますが、その後の見通しは暗いものではありません。ただ私は、三十年ないし五十年の将来を考え、今のうちに植林の如きものに投資しておくことが賢明だと思います。理事会がこの際思い切つて植林に踏み切ることを切望いたします。

第七、職務章程作成の問題。同志社には各職の分限に関し寄附行為に示された、大ざっぱな規程のほか、細かい規程がありませんので、大体常識と善意で協力して過ぎて来ましたが、時々混雑を来たすことがあります。目下の如く互に協調的にやっている間は問題は起りませんが、将来のため出来るだけ詳細な職務の分限を規定し

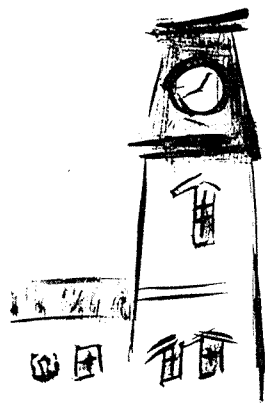
ておく必要があります。例えば総長と理事長の関係、総長と各学校長との関係、理事長と各学校長との関係、理事会と教授会及び教諭会との関係等はつきり規定する必要があります。これは大学管理の問題にもふれるもので、色々な困難なことも含まれていると思います。が、ことなきときに職務権限の章程を作つておくことが必要ではありますまいか。私はそれを永年意願し乍ら未だに実現し得ないことは遺憾であります。その理由は人手の不足であります。が、早急に適任者を得がたい事情にあります。これも残された問題の一つであります。

第八、最後に精神教育徹底の問題につき一言します。これは最も大切な問題であります。が紙数制限のため、他の機会にゆずり、ここには、ただ二つのことを列挙します。同志社全員が同志社教育の責任を自覚し、それを日常の業務において実行することであり。第二は、その実現の手段として適當なる機構制度を設定しこれを活用することであり。

新島研究会の如き、有志の手に任せきりにせず、学校自らが金をかけ、徹底的に新島先生を研究して、時代の進運に即応するよう、教育そのものに、金と熱とをかけることであります。

九十周年記念事業募金の如きも、ただ、金の問題ではなく、同志社精神の試金石であります。私は全同志社の関係者が、創立記念の週間に当り、祈りつつ協力前進せんことを意願するものであります。

(同志社総長)



人間の理解と

友情のために

平澤 興

このたび同志社時報が出されるに至ったということを聞いて、まことに喜びにたえない。かつて同じ学舎に学んだものが互に心を傾けて語りあうことは、先輩にとっても後輩にとっても、ほんとうに嬉しいことである。理想とか夢とか、むずかしいことを言わなくとも、そこにはたしかに共通の感激があり、母校の歌一つで年齢をこ

えて人を動かすものがある。母校の力にはたしかに想像以上に強いものがあり、老人にはこれを若がえらせる力があり、若人にはこれを円熟させる力がある。

世の中が忙しくなると、人間の生活もとかく機械的になり易い。忙しいという字は心(心)を亡(うしな)うということだと聞いたが、たしかにそういう点はある。世界が目ごとに狭くなるのだから、忙しくなるのは当然であり、一面忙しくなるということは個人の生活から見れば、逆に個人生活が広くなることだとも思われるが、それにしても人間が何よりも大切な心をうしなってはナンセンスである。そういう意味でも今度発刊されることになった同志社時報には、十分その意義があろう。老いも若きも、かつての学びやの心にかえって人間をとりもどすということは、たしかにたいしたことである。ただ特に心しておきたいことは、もはや島国ではなく、世界のメーリン・ストリートに接している日本なのだから、少しでもセクシヨナリズム的な臭はこれを避けるようにすべきであろう。同窓という血をかけた人間が派閥的に集まって精神の狭小化を来すのではなく、心の血を分けた人間が心と心で語りあい、普通の人間以上に深く知りあうことによって、人間の理解と友情とを深め、これを狭い同窓以外の人々や社会一般に広め、さらにはこれを国際的の理解や友情にまでのはしてこそ、はじめてこの時報発刊の真の目的が果たされたことになるのではあるまいか。そしてそこにこそ同志社建学の精神があり、新島襄先生の精神もあるのではなからうか。わたくしは心から同志社時報の前途を祝福申しあげる。

(京大総長・父兄)

慶応義塾と同志社

高 村 象 平

本誌の読者は氣負つたいい方だとお感じになるかもしれないが、私は同志社を関西の慶応義塾であると考へている。それは両校の氣風が共通しているというようなことからではなく、それぞれの設立の趣旨において極めて相似した宣言がなされており、それが今日まで継承されているからである。

同志社大学設立の旨意に「自治自立の人民を養成する」と、「教育あり、智識あり、品行ある人民」「即ち此の一国の良心とも謂う可き人々を養成せんと欲す」と述べられていることは、本誌の読者のつとに御承知のところであらうし、また事実この実践によつて同志社が他の私立大学と異なる氣品の高さを具へている所以であると自負されていることと思う。しかも右の設立の趣旨において、慶応義塾もほとんど同一目標を掲げているのである。すなわち創立者福沢諭吉先生が、慶応義塾をもつて単に一所の學塾たるに甘んぜず、実に全国の氣品の泉源たらんことを期すと明言されているのもこれである。一は一国の良心ともいふべき人々の養成を期し、他は全国民の氣品の泉源たらんことを期す。表現は異なつても、それに含まれ

た真意においてもまったく同一である。そしてこの共通した目的に向つて、安政五年から明治二十一年からとの出発の時は相違しても、ともに邁進の歩を進めてきている。設立者は異なる。設立場所は関東関西の差がある。しかし両校の間に極めて親しい感情が醸し出されていることは公然の事実である。したがつて私が同志社を関西における慶応義塾と考へ、いわば身内に對するような親近感を同志社に抱いているのも無理からぬことと、読者には御了察いただけると思ふ。

明治初期の先覚者がわが國の獨立と維持、發展を真剣に考へ、その方途として教育を第一義に置き、それらの所信の宣言において期せずして一致するところがあつたのは、注目すべき事柄である。その福沢、新島の兩創立者をいたゞく慶応義塾と同志社の兩校は、それぞれの設立以來外形は角ばらない形式と雰囲気のうち、内には學問以外の力には決して服しない氣概を秘めて、真理の追究と人材の育成に専念して今日にいたつていのである。この東西相提携する態勢は向後なお長く続く続けられてゆくし、またゆかねばならぬと私は確信している。

この度「同志社時報」が創刊されると聞く。慶応義塾には「三田評論」と題した學校當局と卒業生とを結ぶ機關誌がつとに刊行されていて、母校愛を深める手段となつてゐるが、同志社時報もまた同じ役割を演じてゆかれることを期待して、その發刊に對し心から祝意を表したい。事実この創刊はわがことのように嬉しいのである。その健やかな成育をこいねがう氣持において、私は人後におちぬと明言できるのは嬉しいという以上に有難い極みである。どうか関係

当局者の熱意とそれを受け容れる卒業生の母校に対する愛情とが相い合して、発行の号をおって立派な機関誌に成長、発展されんことを心から念じてやまない。

この秋の一日、私は函館に赴いた際、函館湾に臨む港の一隅にひそやかに立つ「新島襄脱出の碑」に案内された。そして元治元年六月十四日の夜半、先生が禁をおかしてアメリカ船に乗り水夫として苦難の一年を送られたという在りし日を偲んだのであったが、帰京して間もなく「同志社時報」創刊についての感想文をもとめられた。

何かの宿縁でもあろうか。それはさて置き、明治二十三年一月二十六日の時事新報には「新島襄氏の卒去」と題して福沢先生は「今その訃音に接し、日本社会独立の為に此流の一人を失ひたるを惜み」弔意を表されている。その文中にいう、「一身の独立の実なくして漫に国家の独立を言ふは、身躬から鯨飲を恣にしながら举世皆醒めんことを訴るに異ならず。独立の男子ありて然る後に独立の国を見る可きなり。今新島氏は今世の流俗に処して其流に流れず、教育宗教の事に熱心して多年其節を渝へず、真に独立の士と称す可し。其身死するも其名は消す可からず。天下後世、氏の遺風を慕ふて起つ者ある可し。亦以て聊か地下の靈を慰るに足る可きか」と。爾来星霜流れること七十余年、福沢先生の期待されたように同志社は発展をとげて、その偉容を京洛の地に誇っている。そしてこれに加うるに、同志社時報の発刊をもつて新島門下の卒業生の団結が層一層と強固となることが期待されている。慶賀すべきことである。恐らく泉下において福沢、新島の両雄は莞爾として東西両校の提携を見守っておられるに相違ない。敢えて附言する次第である。（慶応義塾長）

私学の発展

堀 経 夫

学園内の正確なニュース、情報などを、そこに勤務する教職員、その卒業生、他の諸学校、関係各方面などに、定期的に知らせることは、学園の規模が大きくなればなるほど、ますます必要になってまいります。ことに私学の場合にそのことが痛感されます。と申しますのは、「私学はたいいていそれぞれ特有の建学精神をもっており、その精神がいかなる手段方法によって実施されつつあるかを、広く理解してもらうことが、大切である」からであります。そのためには、学園内における諸行事、諸施設、または人事について、報道することが必要でしょう。また建学精神そのものについての記事のせることも有益でしょう。

そればかりではなく、以上のような内容が毎号つまかさなっておりますと、後日、何十周年目かに学園史を編集する際に、その資料として非常に役立ちます。なお、申すまでもなく、このように資料としての価値を発揮するためには、各号の内容が正確なものでなくてはなりません。

長い輝かしい歴史と伝統をもつておられる同志社が、このたび定期的に時報を出されることを聞き、平素何かにつけてご厚誼をいただいています関西の私学の一員といたしまして、心からお祝いを申し上げます。

（関西学院大学長）

発刊によせて

ことばの花束



良い木は良い実を結ぶ。

成るに由る

(同窓会長)

アーモスト大学のシーリー総長が、当時の学生新島襄を推挙するようもとめられたとき、「金は金メッキすることはできない。『You Cannot Gild Gold』」と答えた。この純粹性こそ同志社の遺産であり、われわれの遺産である。

アーモスト
シーリー

(アーモスト大学第十一代代表)

コミュニケーションという言葉は、日常よく使われます。これがないでは私たちはお互いに理解しあえません。この新しい雑誌が学園の友人や卒業生たちと連絡しあえる「きずな」になると思います。私たちは、共にその目的が、果せられるよう希っています。

Alice E. Marvin

(幼稚園長)

同志社が綜合学園としての実を發揚し、一貫した精神教育を充実に、社会の要望に答へうる人造りを完成して頂きたく思います。

斎部一郎

(連合父兄会長)

母校を愛する一卒業生として希うことは、同志社が外的・量的發展とともに、より自由にして創造的な生命を、一層發揮する学園となることである。

難波紋吉

(神戸女学院々長)

隣人愛を説くわが学園においてこそ、人間とその生活に対する具體的な配慮が、他にさきがけて望まれなければならない。

西村熟通

(教職員組合連合委員長)

わがカールトン大学並びに同志社大学の卒業生たちが、自由と人間性を尊び、いかなる脅威にもめげず、それに挑む意志をもって邁進せんことを。

ペリオ・リツチエル

(カールトン大学第五代表)

私どもの道とする和敬静寂の精神は、また、新島先生の精神に通じます。お互の歩む道は一つです。

千 宗 興

(裏千家宗匠)

針はつねに天極をさし、心はつねに神理にむかう。

田 田 忍 心

(法学部教授)

私学の本領は、つねに校友・同窓との家族的な繁りにある。各校の当局者がこれを意識して推進しなかつたら、公立学校となり下る。現在の母校にそれを希望する。

宇野勇次

(平安教会牧師)

同志社に関する限り私は悲観主義者ではない。何故なら母校の歴史に神の摂理を味読するからである。

湯浅八郎

(国際キリスト教大学名誉総長)
(A・B・C 順)



郷土色雑感

上野直蔵

東奔西走などいうと、やや大げさになりますが、学校の用事でよく方々へ出かけます。先日九州の方へ引きつづき三、四度出張しました。旅行のたびごとにいつも感ずることですが、ローカル・カラーといえますか、郷土色といえますか、地方地方の特色がだんだんと失われて、どこへ行きますしても、家のたたずまい、ホテルや旅館の構造、またその献立、それにみやげ物などが、大体似たり寄ったりのものになってしまったようです。九州でも四国でも北陸でも同じようなコケシ人形を売っています。コケシ人形などというものはもとはどこか一カ所の特産物ではなかったかと思えます。それが今では全国的なみやげ物になっているのです。もともと、はるばるアメリカまで出かけて「Made in Japan」の品物を買って帰るような時代ですから、それもしようがないのかも知れません。しかし、

ともかく地方の特色がだんだんと薄れて、すべてが画一化されてゆくのは、旅人にとってこよなき寂しさであります。

しかし考えてみると、これは旅人の単なる感傷にすぎません。といえますのは、画一化の現象は生活の必要そのものに根ざす一つの必然としてほとんど不可抗的な現象だからで、たとえばオランダのあの「風車のある風景」がどれほど牧歌的で昔なつかしいものだったとしても、電動力の方が生活にとってより一層能率的だとすれば、風車は次第に影をひそめねばならないでしょう。オランダを訪れる旅行者たちは、あるいはそこに一抹の寂寥を感ずるかも知れませんが、しかし生活の必要は容赦なくそのような感傷を吹きとばしてしまうのです。京都の町の古い「よき」は紅殻格子のあのシットリと落ちついた家並のうちにあるかも知れませんが、しかし洋風の近代建築の

方が生活上便利だということになれば、どれほど悠長な京都人もいつまでもあの暗い昔風の家に住みつづけようとはしないでしょう。わたしの子供の時分には男も女も大い and 和服だったものです。しかし現在電車の中などで和服の男性を見かけることはほとんどなくなりました。東京郊外の八雲小学校の卒業写真によれば、一九二一年の女子卒業生は二〇名で、全部が和服だったそうです。髪型は桃割れ一四名、オサゲ六名となっています。ところが一九三六年の卒業生八五名は全部洋服で、髪型は、オサゲ七、ヨコワケ一七、オカッパ六一となっているそうです(筑摩書房刊、『日本の百年』(5)一五二頁)。わたしのような明治生まれの人間にとっては、桃割れに和服の女の子などはなつかしいものの一つですが、しかしそれも今では昔のユメです。生活の合理化という至上命令は古い日本美などといったものをまたたく間に過去の上に埋めていくのです。

そして、それでよいのではないでしょう。わたしは右に旅人的なノスタルジアから地方色の喪失をなげきました。しかし純粋な郷土色といったものは封建的・閉鎖的な社会においてのみ純粹に維持されるものです。文化の進展はあらゆる社会の壁を打ち破ります。それまで孤立していた村と村、都市と都市、さらには国家と国家とが次第に友好的に結びついてゆく。閉鎖的な社会から開放的な社会への発展です。それにつれて地方の特殊性が次第に破られてゆくのです。たとえばコケシ人形はかつては東北地方の一寒村、かりにA村の特産物でした。しかしなぜにそれはいつまでもA村の特権的産物でありつづけねばならないのでしょうか。A村とB村とが一つに結ばれれば、B村もまたコケシ人形を郷土特産として売り出す権利を

もつのです。同様に全日本が一つの日本ともなれば、東北地方の特産物がどこか遠い他の地方、たとえば南国土佐の特産物として売り出されてもいいのではないのでしょうか。最近佐渡に旅行したわたしの一友人は、佐渡にも観光バスが走りまわっているといって浮かぬ顔をしていました。彼はおおかた佐渡といえは多くの流人があの金山で酷使されていた徳川時代そのままの古い情緒がいまも残っているものと想像していたのでしょうか。しかし、なぜ佐渡に観光バスが走りまわってはいけないのでしょうか。それともオケサ節のあの媚々たるメロディーによつて象徴される「四十九里波の上」の孤島だけは永久に文化の進展からそれて普通に「寒村」的なものでなければならぬのでしょうか。

文化の進展は否応なしに特殊なものを一般化し、多様なものを一様化してしまいます。しかしそれは生活の合理化を推し進めるものとして歓迎されてよいのではないのでしょうか。言葉一つにしても、かつては東北人と鹿児島人とはお互いに理解し合うことができなかったものです。同じ日本語でもそれほど方言の差が甚だしかったのです。しかし現在では全国どこでも大体標準語で用が足せます。学校教育、新聞、ラジオ、テレビなどのお蔭でしょう。人類の理想としては、全世界の人間が同じ一つの言葉で用が足せるようになればどれほど幸福だろうかと思えます。もっとも、文学的な観点に立てば話はちがってくるかも知れません。シェークスピアの劇はあくまで英語でなければならず、ゲーテの詩はあくまでドイツ語でなければならぬ。日本語をはなれてどこに芭蕉の芸術があらうか。そうした議論も当然出て来なくてはならないでしょう。日本に生ま

れて英文学を専攻しているわたしなどにとっては、日本語も英語もそれぞれに貴重な言語でなくてはなりません。しかし愚見によれば、生活は芸術に優先するものであり、したがってもし生活が言語の統一を要求するとすれば、文学もまたそれに一步譲らねばならないのではないでしょうか。のみならず、全人類の立場から見れば、現に地上に存在する一切の言語は要するに地方的な言葉、すなわち方言以外の何ものでもないでしょう。ヨハネ伝に「初めに言があった。言は神とともにあった。言は神であった。」とありますが、この「言」は果たして何語だったでしょうか。遺憾ながら日本語でなかったことは事実のようです。では、それはギリシア語だったでしょうか。ヘブライ語だったでしょうか。おそらくはそうでなかったでしょう。それは神の言葉として一切の種類の・国境的な差別を超えた一般的な言葉であつたでしょう。『創世記』によれば、人間のあいだの種々ことなる言語はバベルの塔の建築にからんで生じたものだそうです。わたしはこの話の真偽を明らかにしないのですが、しかしいずれにしても、地球とよばれる小さい遊星に住むわれわれの間に現在のように多種多様な言葉の存することは、生活という観点から見てたしかに不都合きわまるものです。たとえば、道路標識一つにしても、「駐車禁止」と「NO PARKING」という二つの言葉が無駄なスペースをとっています。新聞社などでも外国からのニュースを翻訳するのにどれほど貴重なエネルギーを浪費していることでしょうか。もしケネディーとフルシチョフとがまたるっこい通訳などを抜きにして一つの世界標準語で直接ヒザをまじえて懇談したとしたら、核実験の問題もベルリンやキューバの問題もいまずこしスミ

ズに解決されるのではないのでしょうか。

以上連絡もなくダラダラと書いて来ましたが、わたしのいたかったことは、要するに観光客的な好奇心を捨て去れということなのです。珍らしい土地へ行つて珍らしい変わった雰囲気にとりたいたい。シミシミと「思えば遠く来つるものかな」という「旅情」を味わいたい。そういった気持です。それは封建的な偏見だといいたいのです。それはいわばローカルなものへの郷愁なのですが、こうした郷愁は今後次第に満たされなくなるでしょう。生活の合理化がそれを許さないからです。日本を訪れるツーリストたちはあまりにもアメリカナイズされた開化日本にしばしば失望するとか聞きますが、もし本当に異国的な、エキゾチックな、「極東の孤島」的な日本が見たければ、彼らは今から百年ほど前に日本を訪ればよかったのです。わたしは最近、車中のつれづれにオールコック著の『大君の都』(中)を読んだのですが、そこでオールコックは無限の好奇心をもつて一八六〇年頃の日本を眺めています。たとえば彼は一八六〇年三月二四日、大君の宮城へ向かう摂政が殺害された事件をじつに珍らしそうに語っているのですが、一八六〇年といえは安政七年であり、三月二四日というのは陰暦でいえば三月三日のことです。大君はいうまでもなく將軍のことであり、そして摂政というのは井伊大老のことなのです。その頃の日本は外国人から見ていかに異国情緒ゆたかなものがあつたことでしょうか。しかし一九六二年の日本にその頃と同じような異国情緒を期待するツーリストたちはすこし虫がよすぎるのではないのでしょうか。それはちょうど佐渡に観光バスを見いだして失望したわたしの一友人と同じ種類の見当ちがいでない

でしようか。

初代イギリス公使として三年間日本に滞在したオールコックはおそらく安中藩という一小藩に新島七五三太という一人の青年藩士のいたことは知らなかったでしよう。井伊大老の暗殺された年、すなわち今から一〇二年前の一八六〇年には彼は一八歳の青年でした。彼はその年には蘭書によつて天文・物理学を研究し、また幕府の軍艦教授所に通つて数学・航海学を學んでいました。そしてそれから四年後、彼は幕府の禁令を犯し、函館からベルリン号で国外に脱出するのです。すなわち外国人から見て全くエキゾチックそのものとも見えた当時の日本にもこうした進取の気象に富んだ青年たちもいたのです。彼らは封建的・鎖國的な日本をいわば世界へと解放しようとして烈々たる希望に燃えていたのです。外国人の旅情を満足させるために日本をいつまでも「古い日本」に固定させておくといったことは、若い新島七五三太にとって全く思いもよらぬことだったのです。日本はたんなる観光の対象たるものであつてはならない。コケシ人形などを売つて小さい利をかせぐ売店のごときであつてはならない。日本は世界の日本として全人類と一つに結びつくのになければならない。すなわち、過去からの古い殻をブチ破ること、これが若い安中藩士の雄大な目的だったのです。この目的から生まれたもの、それがまさに同志社にはかならないのです。

同志社が設立されてすでに九〇年近い歳月が流れています。最初わずか八名の生徒を擁して設立された同志社英学校は、春秋八十有余年を経て、いまや一万数千名の学生を擁する巨大な綜合大学にまで発展しました。したがつて現在の同志社はもはや昔のようなロー

カル的特殊性は見られないでしよう。よくわたしは、現在の同志社には同志社の特色が全く失われている、と聞かされるのですが、しかし同志社の特色とはどうしたものを目指すのでしょうか。設立当初の私塾的な同志社こそ本當の同志社だったのでしようか。あるいはわたしが学生だった頃のあの法・文兩学部だけだった頃の同志社が眞の同志社だったのでしようか。しかしそうした昔の甘い思い出に恋々たることは、ちょうど最近の寮歌ブーム、あるいは旧制高校への郷愁、と同じ種類のセンチメンタリズムにすぎないのでしよう。むしろ同志社の眞の特色は、相国寺畔の一私学から日本の一私学へ、いな、世界の一私学へと限りなくその視野を拡大してゆくところにこそあるのではないでしようか。それは安中という小さい郷土に満足できないで、蒼海の彼岸なる未知の国々を憧憬した若き日の新島先生の気持ちにも通するのではないでしようか。一言でいえばここでも地方的な郷土色を惜しみなく消してしまうことが大切なのです。同志社は観光の対象ではなく、生活に直結した學問・教育の府なのです。キリスト教的精神がその基底たることは勿論いうまでもありません。しかしそれは小さい分派的な精神であつてはならず、全人類の福祉に結びついた無限に包容的な人類愛の精神でなければならぬと思います。ですから同志社は小さく固まつてはならず、無限に開放的でなければならぬのです。繰りかえしていえば、古い郷土色の払拭、旅人的感傷の惜しみなき放棄、そこにこそ同志社の未来はあると思うのです。

(同志社大學長)

わが年輪と夢

もし、同志社の夢を語らんとせば、そこには、すぎ去った足跡を知らねばならない。さらに現状を克明に把握しなければならない。夢は、二十二が四の算術級数にあらずして、幾何級数の飛躍がなければならぬのである。自然、立案があり、見透しがあり、自信があり、さらに決意があり、これに若干の冒險さえ伴わねばならないと信ずる。

同志社スピリットを要約すれば、良心教育の具体化であるといわれるが、新島襄先生の有名な箴言が生まれたのは、ご永逝の満二カ月前にあたる、明治二十二年（一八八九年）十一月二十三日付で、同志社生徒横田安止氏あてに返書された一文中の文字なのである。

新島襄先生年譜第三六八頁から抜粋しよう。

書中に「小生も如此大学計劃の爲久しく家を離れ居候は一方には病氣の爲には宜しからず候得共己に乘出したる船、何如なる風波襲い来るも再び帰湊す可らず、大風も可吹、怒濤可起、只小生は彼岸

秦 孝治郎

に達することを計るのみ。

半途にして沈没するも小生の恐るる所にあらず」「貴君御推察の通、当時募集に尤困難の時にして、一時は実に手の付け方なく、小生は只猫が活眼を開らき鼠穴の口にたたずみ鼠の出て来るを待つのが有様なりき。

動くも目的の爲、又忍びて待つとも計劃の爲、今日も尚待の百様なるも、今となりては、只待つのみならず、農夫が田畑に寒肥をかくるが如く、他日収獲を得る文の準備は、大分致し置き申候」

このお手紙に猫が活眼を開らき鼠の出てくるのを待つ、といった比喩は熱血はほとばしっているが、心に任せられぬ病身の無念さが伺われる。ただ終りに「大分致し置き申候」の満足感は、せめてものかすかな感懐であろう。

さて、良心の一句には、当時の政治、政局を慨嘆しひろい視野に立って述べられたものにほかならない。



「政事上の実況は実に実着なる真面目なる男児の乏しきを覚へ、益
良心の全身に充滿したる、丈夫の起り、来らん事を望で、止まざるなり、
小生近來の自詠を御一覽可被下候」

（片仮名の文字と「有感」の七言句は省略する）

今さら良心論をくり返すものではないが、良心の名句は四十八
歳の新春を大磯の客舎で迎えられた、先生の有名な左の迎春の賦と
全く一対になり、また現在から将来への待望、対照ではなからうか。

送歳休悲病羸身 鶏鳴早已報佳辰

劣才縦乏濟民策 尚抱壯圖迎此春

この壯圖とは、やはりここにいるところの夢である。先生の一生
涯は献身でありまた冒險でさえあった。壯圖とは「同志社大学」設
立の悲願であったが、これが先生臨終の遺言をしたためた徳富猪一
郎氏を委員長として、明治四十五年（一九一二年）四月、同校の実
現を見たのであって、春秋ここに五十星霜をけみしたのである。

くしくも私はその第一回生として入学し、多くの思い出が走馬灯
のように展開する。

この年の現勢としては、教師四八名、嘱託二九名、職員一一名、
計八八名、学生生徒一、〇三〇名に過ぎなかった。これは同志社創
立三十五週年に当るのであるが、こえて二十五週年を経た創立六十
週年には専任教師一六八名、嘱託七七名、職員五九名、計三〇四名、
在学生五、五六一名、実に五倍半に増加している。

その後、二十年を経た昭和三〇年の創立八十週年においては、専
任教師四〇九名、嘱託三四三名、職員三六一名、計一、一三名、
在学生は一九、一一五名、三倍六分に達した。今昭和三七年五月に

は専任教師四六四名、嘱託四〇一名、職員四三六名、合計一三〇一
名、在学生二三、二九五名となり、赤裸々に全学園の統計としてそ
の歩みを記録した。

そこで、右の増加に伴って施設の方がどのように増えているかを、
土地と建物だけについて調べたなら、左の結果となった。

（創立60週年）

（創立80週年）

（五月現在）

土地	二五、二三坪	八一、三五〇坪	一四三、八〇五坪
建物	六、五九七坪	一二、六三三坪	三九、一〇〇坪

この増加率は、過去二七年間に漸増した数字であり、（土地は実
測すれば相当増加する）近々六年間の急激な拡張であり、また充実
であるその実状を物語っている。

かつて、創立六十週年記念事業が企画されたとき、大きな夢が
あった。「学生大衆はかく翹望する」の希望事項は、一八項の多き
に達したが、やがて出現を見んとしているものは、壮大、完備の学
生ホール、寄宿舎、図書館の充実、野外グラウンドの新設などであ
る。

ただし同志社小学校の新設や、校内大浴場の設置、同志社博物館
の設備などには、未だ手がとどかない。しかし、女子大学の体育館
や同志社大学新町校地の臨光館、尋真館の壮観、アーモスト館ゲス
ト・ハウス、香里中、高校の合併と二大校舎の新築、多彩な岩倉の
高校新装などは、当時とうてい考え及ばなかった業績であって、こ
の間その衝にあたった人々の努力と父兄、在学生のなみなみならな
い貢献であらう。

來春より開設せらるべき工学部三学科増加のごときは、時代と社會の要求に即応するものにはかならないし、また新神學館の出現は、多年伝道者教育に報いられた結晶たると同時に將來に對する精神教育、社會淨化への大きな負託であらう。

「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ實現に至らせるのは神であつて、それは神のよしとされるところだからである。すべてのことをつぶやかず疑わないでしなさい」。(ピリピ書二、一三、一四)

ひとり神學教育に干与するもののみならず、わが學園の職務に奉仕するものは、「神のよしとされる」夢(ヴィジョン)に忠実でなければならぬ。過去數年にわたる膨張率をもつて、將來の伸展を律することができるであらうか。為政者の政治的用語をう呑みにして、學校財政を企画しうるであらうか。

創立者の輝やかしい衣鉢を堅持し、八十七星霜に刻まれた年輪を忘れることなく、より偉大なる新天新地を開拓しつつ、邁進しなければならぬ。われらに与えられた課題、遠大なる、その夢を抱きながら。

(同志社理事長)

安中市における

新島先生旧宅保存会

このたび群馬県安中市長、萩原弘氏らが中心となつて、同市新やしきの新島家の旧宅を安中市のすぐれた史蹟として復元保存しようする運動をおこし、去る十月その趣意書が発表せられた。

一八七四年十一月二十八日夜半、先生は滯米十年の後安中に到着、翌朝新やしきに両親の閑居を訪れると同時に、この地においてキリスト教伝道の第一声をあげられた。この旧宅は一八六九年急造の江戸詰藩士引揚住宅として、臨時建築したもので、九十余年の星霜を経た家であるため、このまま放置すれば腐朽をまつほかない状態になっている。木造かやぶき平家、二戸建長屋の一戸で、ながい間貸家となつていたので、隣接の敷地(二三八坪)へ復元移築しようとする計画。このため旧宅とその敷地入手費用、ならびに移築、諸設備費など、約五百万円を広く募る運動をすすめている。旧宅の北隣は、元円墳で新島先生の碑、湯浅半月翁の詩碑がたてられている。